
知ってるよ。

桜羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知ってるよ。

【コード】

N4912H

【作者名】

桜羽

【あらすじ】

知ってるよ。君に彼女がいること。ねえ、なんであの子なの…？
私はずっと君が好きなのに。

(前書き)

なんか、

ごっちゃごちゃに

なっってしまった…。

よくわからない部分が

多いと思います…。

知ってるよ。

知ってるよ。

「ねえ、奈緒なほ…まだ好きなの？」

「……さあね、」

…好きじゃ悪いか？

「…だってアイツ、」

「知ってるよ」

教室の片隅にいる、君に目を向けた。

男子の輪の中で楽しそうに、会話してる君。

「……嫌いになれるなら、なりたいよ」

いつからだったかな？

君の事を好きだったのは。

確かあれは…小学校の頃だ。

時はずいぶんと遡る。

今から約6年前のこと。

私が、初めて君と同じクラスになったとき。

まだ話した事もない君に私は声をかけたんだ。

「ねえ、君も、“なお”って言うの？」

名札には、

『5年3組・川口 尚』

と、かかれていた。

「うん、そっだよ。お揃いだねー」

そう言って笑った君は、ひまわりのようだった。

そっだ

この時からだ。

少しも色褪せる事のない、大切な大切な…

君と私の始まりだ。

「な おっ!!」

誰か、女の子らしい声に私は呼ばれた。

「んーっ?」

……………ん？

声が誰かと重なった。

「奈緒じゃないよっ？」

そう、悪ガキのような声と顔で私に言った。

……………尚。

「う、うっさい…しょうがないじゃんー。名前同じなんだから…」

私は尚に反抗する。

呼ばれたのは私じゃなくて、尚だった。

私は「なお」って言った女の子に目を向けた。

その女の子は、私のクラスの、可愛い子。
性格よくて、もてる。

私はこの子が嫌い。

「あ、ごめんね。奈緒ちゃん……」

私の目を見て、謝ってきた。

「や、別に大丈夫」

私はすぐさま目をそらして、冷たく対応した。

『嫌い』

っっていうより、苦手……っっていうか……。

よくわからない感情。

だって、この人。

「尚、今日遊ぼ？」

「うん、いーよ」

尚の彼女。

『嫌い』なんて。

ただのひがみかもね。

「尚の彼女だから」

そんな理由で嫌うなんて。

この人と尚が付き合い始めたのは、たしか高校入ってすぐのこと。

この人が尚に告白して、尚はオツケーした。

他人からしてみれば
ただそれだけのこと。
なんだろう。

だけど私にとっては
人生の中での一番の傷になった。

「尚に一目惚れだったんだあ」

確か、この子は誰かにそう話してた。

それがやけにイラついた。

私は……。

6年も好きなのに。

なんで？

なんでこの子は簡単に告白して簡単にオッケーもらえるの？

考えても、考えても

答えはひとつ。

… 尚が選んだから。

わかってる。

わかってるよ。

だけど

この2人が一緒にいるところを見ると、

もうどうしようもなく、涙が出そうになるんだ。

「奈緒、おいで？」

尚の言葉にハッとすする。

「ん…、なにっ?」

そう言って尚に近寄った。

すると、尚は笑顔で私を見た。

その笑顔に心臓が波打った。

「明日、あのCD貸してね?忘れんなよっ?」

「あっ…忘れてた」

そういえば、昨日も言われたんだった。

んで今日、忘れてしまった。という…。

「やっぱり忘れてるしー!!だめだ。絶対に明日も忘れるー。
今日、家までとりに行く!」

そう言って私のオデコをペチッと叩いた。

「いっつ、……ええ!？」

ちよ、ちよつと…

いいいつ、今なんとつ……!?!?

「今日一緒に帰るから!!昇降口で、待っててー」

サラッと言った、尚。

幸い、尚の彼女はこの場には、いなかった。

「彼女いるのに」

なんて、心の中で思ったけど

……けど、

「わかった。じゃああとでねー!」

少し、だけ。

… 今日だけだ。

* * * *

「奈緒、わりい。補習の話で残ってた!!」

軽く頭を下げながら昇降口へとやってきた尚。

「遅いよー、ばあか」

私は尚に笑顔を見せた。

すると尚も笑顔になった。

尚の笑顔は大好き。

だけど、その笑顔を彼女にも見せてるんでしょ？

そう思うと、苦しくなるよ。

「久しぶりだね、一緒に帰るの」

小学校以来だろうか。

家までは約25分で着く。

長いようで短い時間。

「そだなあ…、あつ！！ていうか、今度勉強教えてよ」

「…へ」

いきなりの頼みごとに目を見開く私。

…そんなこと、

できるはずないじゃん。

彼女、いるのに。

そうやって尚が私に優しくするから…。

私は尚を諦められないんだよ？

「奈緒、頭いいし」

「……でも、」

彼女

彼女

彼女。

その「彼女」という存在が私を苦しめる。

私に告白の勇気をなくさせる。

言いたいのにな、…尚には彼女がいるから。

今告白したって困らせるに決まってる。

「いいじゃん。俺、奈緒がいい」

ふいに呟かれた一言。

「彼女いるじゃん」

イラついて、つい口にしてしまった一言。

「……あ、ご、ごめん、わたし……」

「……いや、いいよ。俺こそごめん。そうだよな……。彼女、いるしな」

ズキン、と
心が異常なまでに痛んだ。

知ってるよ。

知ってるよ。

知ってるのに…

「……………奈緒？」

なんで

「……………奈緒……………」

涙なんかでるんだ。

「…なんで、泣くんだよ…どっした？」

“どっした？”じゃないよ。

「…言わなきゃわかんないよ？」

「……………」

“好き”

そう言ったら、尚ほどんな反応する？

ねえ、

もう、だめだ。

「…な、」

「好き」

「…………え…?」

好きなの。

「ずっと、6年間ずっと…好きだった」

あの子なんかよりも
ずっと長い間。

「……………」

「尚の彼女よりも、ずっとずっと…」

なんで、

「……………」

「…好きなんだよ…」

…あの子なの………？

「…奈緒、」

そんな優しい声で、呼ばないで。

「……好きだよッ……」

もう抑えられないほど、好きなの。

「…じゅん、じゅめんな…」

答えなんてわかってた。
わかってたけど

「…同じ気持ちじゃないなら、そんなに優しくしないでよ…」

優しく、しないで。

余計に君に溺れてしまう。

「……………」
「ごめんな、」

どんなに強く想っていても、
叶わない想いがあるってことを、
改めて知った。

だからといって

いくら離れてたって、想いが静まることはないと思っ。

知ってるよ。

…知ってる。

じゃあ私のこの気持ちはどこへ行けばいい？

知らないの。

「…ありがとう、奈緒」

そう呟いた尚の顔は

笑顔だった。

きつとこれが

私に向けられた

最後の笑顔。

きつともう、私の気持ちを知ってしまった以上、尚は私に普通には接しなくなる。

なら、最後にひとつだけ。

「…大好きっだぁぁーっ！！」

そう、私は叫んだ。

そして私は尚に一番の笑顔を見せた。

せめて、

私の告白を忘れないでいてほしいから。

少し日の暮れた、帰り道。

私の想い、ちゃんと伝えた。

きっと、この道を歩くたび今日の事を思い出すのだろう。

尚も

そうだといいな…。

「知ってるよ」

そう言っつて尚は笑ってくれた。

その笑顔を

どうかいつまでも絶やさないで。

尚が笑顔でいられるなら、それでいいから。

人の幸せを、

初めて心から願えた。

そんな、初恋だった。

e n d ,

(後書き)

純愛！！

が

テーマだったんですが。

…それてしまいました。

そして

今までで一番まとまりのない、この作品を読んでもくださり
ありがとうございました！！(ノ 丁)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4912h/>

知ってるよ。

2010年10月28日04時52分発行